モラル・パニックとしてのいじめ問題

徳岡秀雄
(関西大学)

モラル・パニックとは，ある事態や出来事が，社会的価値や関心にとっての脅威と定義され，その意味づけがマス・メディアによって固定化され，文筆家，聖職者，政治家その他の人々が道徳防衛のためのバリケード構築に乗り出し，社会的に信望のある専門家たちが診断を下し，対策を提言し，それへの対処法が創り出される，そのような事態である。

かくしてその事態は，消滅したり潜在化したり悪化したりすることで，より一層，人々の目に明らかになる。パニックの対象そのものは，ときには目新しい場合もあればずっと以前から存在していた場合もある。それが突然，表舞台に踊り出てくる。時にはそのパニックは過ぎ去り，人々の記憶にとどまるだけで忘れ去られてしまう。しかしある時には，深刻で長期的な反響をもたらし，法政策や社会政策，さらには社会の自己認識の在り方をさえ変更させる。

特定の社会的カテゴリーが社会問題に仕立て上げられ，モラル・パニックが創出される過程で，とりわけマス・メディアの果たす役割が大きい。マス・メディアは，意図的であれ無意図的であれ，道徳的義憤の担い手として，不安・不正への怒り・パニックなどを生み出してきた。そのような感情が，特定の価値を擁護すべきだとする認識と一致した時，新しい規則制定のための，あるいはまた，社会問題の定義づけのための前提条件が出現することになる。(S. Cohen)

Ⅰ．自己成就的予言としてのいじめ問題

①状況の定義づけ

もし人びとが，状況を真実であると決めつければ，その状況は結果においても真実である。(W. Thomas)

一度ひとびとが何らかの意味をその時の状況に付与すると，続いてなされる行動やその行動の結果は，この付与された意味によって規定される。世間の人々の状況規定がその状況の構成部分となり，かくして状況規定そのものが，その後における状況の発展に影響を与えるからである。(R. Merton)

いじめの定義は主観的であり，また，いじめは見えにくいだけに，「状況の定義」に左右されやすい。

②情報化社会での社会問題

現代社会における情報は，直接体験的なものではなく，マス・メディアによって処理された間接的・二次的な記号情報にならざるを得ない。したがって，社会問題を定義づけ，形成していく上で，マス・メディアの役割はきわめて大きい。また，わずかな現実体験をすら，マス・メディアの提供する枠組みで解釈してしまう。

③いじめが増えているとするマス・メディアの状況規定

見えたことは客観的事実であるとしても，

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

何故それを見ようとするのか，というレベルでは，社会意識が反映される。現代は社会の眼が子供に集中している時代であり，マス・メディアもその社会意識を反映し，またその社会意識を強化する。人口転換，健全育成イデオロギー，少年非行の変質，など。

④神経過敏化

いじめ問題の深刻化は，いじめ行為の実質的増加にもよろうが，行為に対する解釈図式の変化にもよる。すなわち，以前であればいじめとは解釈されなかったであろう出来事までが，いじめという観点から解釈される。

⑤手口・方法の教唆，モデリング

いじめの一般化という情報は，潜在的にあるいじめ願望を抑制する必要は無いのだと思わせ，実行行為への抑止力を解除し，いじめのファッション化をもたらす。

⑥動機の付与

動機は，人間が自分の行為を社会的に正当化することであり，他者を納得させ，さらにその先の行為を押し進める手段である。動機の表明は他者へのアピールであり，行為の戦略である。(W. Mills)

遺書，逸脱行動の合理化など。

⑦ポジティブ・フィードバック・メカニズムによるいじめ問題の深刻化

全ての社会現象は，多くの要因の相互連鎖の環として理解される。それを単純化すれば，エゴとアルターとの，あるいはパフォーマンスとサンクションとの相互作用だといえる。P→Sの連鎖を自明の前提としてきた伝統的実証主義とは対照的に，ラベリング論はS→Pの連鎖に注目する。しかし，両者とも，P→S→P→Sの要因連鎖を意図的に特定の局面に限定した上で，理論構築を目指していることは明らかである。双方の視点を視野に入れると，相互因果的モデルが浮上してくる。この相互因果モデルはさらに，均衡維持的なネガティブ・フィードバックと逸脱増幅的なポジティブ・フィードバックに二分されるが，いじめ問題の現状分析には，後者のモデルが有効であろう。

Ⅱ．モラル・パニックは，いじめの解決を阻害する

①いじめの原因

②いじめの克服

③解決策の歪曲

いわゆる Evil-causes-evil fallacy を前提とする「道徳企業家」の大合唱のために，冷静な分析が阻害されやすい。しかし，潜在的機能分析の手法やラベリング論の Benign Neglect などのインプリケーションに着目すれば，善が悪の原因でもありうるという認識が重要である。悪への対策が，角を矯めて牛を殺す危険性についても自覚的でありたい。

④積極的健全育成か消極的いじめ防止か

この二つの目標はウラハラの関係にはない。したがって，いじめ対策も，葛藤しあう諸価値間の選択の問題になる。特定の対策を採ることによって失われるものが何か，葛藤しあう価値のどれを優先し，どれをその価値のためのコストと考えるのか，牛を殺さずに角を矯めるための均衡点をどこに求めるのか，といったコスト・ベネフィットを明確化して提示することが今後の課題であろう。

NII-Electronic Library Service